



●公益社団法人 日本山岳会 福岡支部

福岡支部報

目次

1. 支部長挨拶		○New Zealand・Mt.Cook 山麓のトレッキング …………… 16
○登山活動の担い手を増やそう …………… 1		○福岡・佐賀県境の山 浮嶽 …………… 17
2. 平成30年度福岡支部総会記念講演		6. 平成30年度の福岡支部活動報告
○元チベット人僧侶 ゲレック氏(アムドの遊牧民) 僧侶を経て日本へ …… 2		○英彦山登山に 16名が参加
3. 輝かしい実を結んだ永年の活動		～山の日記念登山大会 in 福岡2018～ …………… 18
ーパキスタンの NGOと会員としてー		○知られざる道より雷山 …………… 18
○2018年 フンザ「ハートウ・ハートウ」報告 …………… 4		○脊振山地「地蔵」登山 兼 忘年会 …………… 19
○会員50年にあたって …………… 7		○平成30年度福岡支部総会 …………… 19
4. 特別寄稿 石原國利氏の対談録(聞き手: 田村嘉勝)		○夏山フェスタ in 福岡 2018 …………… 20
○石原会員の対談を転載するにあたって …………… 8		○会員の出版 …………… 20
○石原國利氏「井上靖先生 ー想い出すことー」 …………… 8		○支部会員動向 …………… 20
5. 山行報告		○編集後記 …………… 20
○ラサ今昔 …………… 15		

1. ～支部長挨拶～

登山活動の担い手を増やそう

No.12920

◇ 福岡支部長 高木 荘輔

支部長に就任してから、2期目(1期＝2年間)の最後の1年間の始まりを迎えようとしています。

これまでの支部活動を振り返れば、なかなか思うように進まなかった部分もありますが、支部の役員や会員の皆様のご努力で、それなりの意義ある活動が続けられたのではないかと感謝しています。

昨年(2018年)は、「岳人のつどい」を兼ねた「新春ふるさとの山清掃登山会」(2月24日・十坊山登山およびカキ小屋で懇親会)を皮切りに、支部総会(5月20日・早良市民センター・チベット人ゲレック氏の記念講演・懇親会)をはさんで、「夏山フェスタ in 福岡 2018」(6月23・24日・電気ビル共創館)、「山の日記念登山大会」(8月11日・英彦山)、「知られざる道より雷山登山」(11月17日)、「脊振山地・地蔵(675.2m)登山兼忘年登山会」(12月15日・きららの湯で忘年会)などの行事を催しました。また、会員有志で、国内や海外登山もいろいろと行なわれました。

支部での活動以外にも、本部での「総会」や「支部合同

会議」「支部連絡会議」「年次晩餐会」などに出席したほか、北九州支部主催の「榎有恒碑前祭」(10月21日・風師山)や山のトイレ環境を考える福岡協議会主催の「高千穂峰携帯トイレ利用状況視察山行」(10月27・28日・霧島市、高千穂河原)などにも積極的に参加、他団体との交流も深めることが出来ました。とくに「年次晩餐会」には、皇太子殿下も含め約500名が集結、当支部の太田五雄さん(会員番号6486・長野県小諸市在住)が「新永年会員」表彰を受けられ、壇上で小林会長から「永年会員バッジ」が授与されたことは大きな喜びでした。

支部の現在の大きな課題は、依然として会員の「高齢化」とそれに伴う会員数の「減少」が慢性的に続いていることです。これに対しては、未組織登山者に対する「準会員制度」の導入や契約施設利用で割引等の恩典を受けることができる「新会員証の発行」などの活用をテコに挽回をはかってきましたが、やはり基本は、支部独自の山行やイベントを活発にすることで会員の増加と若返りをはかることです。幸い昨年は、登山活動の担い手が少しづつ出てきました。こういう人たちを増やして山行を活発にしたいと思います。

次に「安全登山」の問題です。これについては、「夏山フェスタ in 福岡」や独自の「安全登山講座」を開催し、登山

の知識や技術、体力向上の方法を取得すべく努力するとともに、原則として、すべての会員の山行について「山行計画書」を作成し、支部事務局経由で本部遭難対策委員会へ提出して頂くことを推進して行きたいと考えています。

2019年度も、毎月の役員会（どなたでも参加自由）、事務局体制の刷新と財政の強化、内容がより充実した「福岡支部報」の発行などを基軸に支部独自の事業や4回目を迎える「山の日」（8月11日）関連事業（夏山フェスタや英彦山登山大会など）、他支部との交流事業などの推進に向

け、会員全員で取り組んで行けるよう広報にも力を注ぎたいと思います。

最後に、当支部会員で「福岡支部報」編集者を務める辻和毅氏（会員番号 7698）が、このほど権歌書房（とうかしよぼう）より「山・水・人の風景」という本を出版しました。われわれ山に親しむ人間にとって大変興味のあるテーマが展開されていますので、ぜひ買って読んで頂ければ願っています。巻末に紹介があります。

2. 平成30年度福岡支部総会記念講演

元チベット人僧侶 ゲレック氏（アムドの遊牧民） 僧侶を経て日本へ

No.9826

◇ 渡部 秀樹

平成30年度福岡支部総会記念講演として、福岡在住の元チベット人僧侶・ゲレック氏を講師に迎え「チベット・アムドの遊牧民、僧侶を経て日本へ」を渡部が進行・解説し対談形式で話してもらった。

ゲレック氏については支部報30号に、渡部が彼の生まれ故郷を視察訪問したリポート「チベット・アムドの黄河（マチュ）上流域・花の大草原に遊牧民を訪ねて」を寄稿し紹介した。今回の講演は、その時の報告を基本に映像と談話で紹介し、また、ゲレック氏が12才でヒマラヤを越えてネパールへ亡命したルートに迫ることができればと考えた。



1989年ラサにて（左がゲレック氏、11才）

【ゲレック氏の半生】

ゲレック氏は1978年夏、中国の行政区でいう甘粛省甘南族自治州瑪曲県のムラ（木拉）という名の村で生まれた。黄河の最上流域でアムネマチン山麓を数百km下った河岸段丘にムラはある。生まれてすぐムラ・ゴンパ（僧院）にあずけられたので、もの心つくとき寺の人だった。

数え歳8歳の得度式の際、儀式のため出席した家族に初めて対面する。家族はいないものと思っていたので混乱し苦悩がはじまった。たまたまダライラマ法王の教えを説いた本が回ってきて所持していたときに公安の検査があり補導される。これが原因で子供ながらダライラマ法王がいるというインドに行きたいと無謀なことを思い立つこととなった。

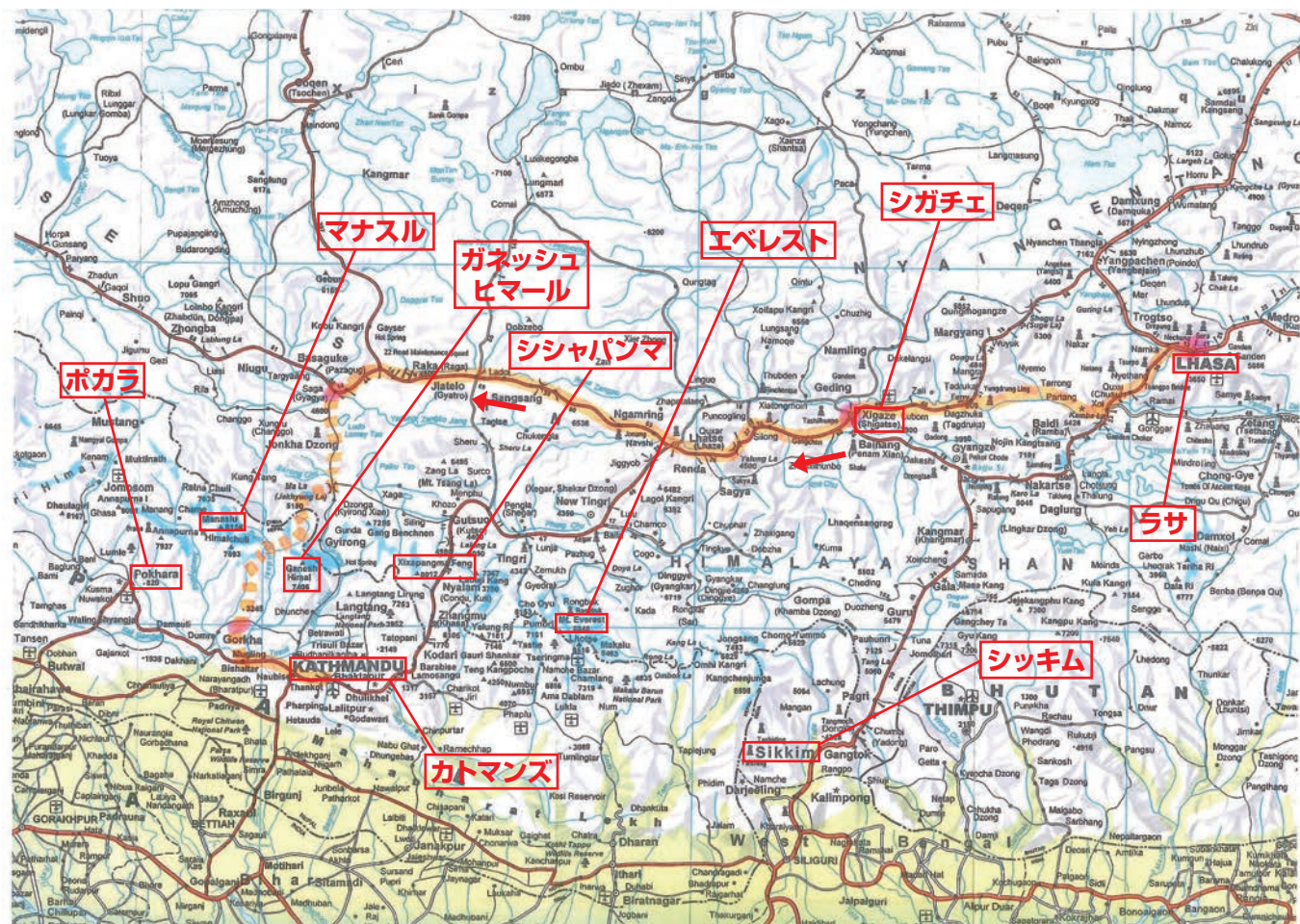


夏の黄河上流ムラの放牧地

1989年ムラの誰にも言わず1人で行動に出る。11才の彼にはインドがどこにあるのかも、どう行けばよいのかも解らなかったが、とりあえず約2000km離れたチベットの都・ラサにたどり着いた。非常に警戒が厳しいが、田舎から出てきた彼は都会のラサではこれが当たり前なのかと思っただけ。実はこの年は中華人民共和国で初となる戒厳令がラサに布かれた大変な年であったのだ。そんな時期、1度目の挑戦は子供ながら夜行作戦を自然と考えた。徹夜で雪山をさまよひ、ついにヒマラヤを越えたと思った。夜が明けあたりを見渡すと見覚えある光景。ワンデリングして結局元の場所へ戻ってしまっていた。間もなく軍にばかり逮捕されてしまう。

2度目の挑戦はうまくヒマラヤを越えることができたがネパールに入ってから中国に通報されてしまい、また逮捕される。2度の過酷な監獄体験後、忠誠を誓い出所。ラサで食うにも困っていると同郷アムド出身者の食堂のおばさんが親切にしてくれた。不思議なことにこの女性は彼がインドに行くつもりであることを見通していた。否定しているにもかかわらず5才の娘と7才の息子を一緒に連れて行ってくれと頼まれる。12才の自分だけでも命の保証はなく死を覚悟して実行すべきか悩んでいたが、とても幼児を連れて生きて到達できる可能性はないと断わる。しかし、死んでもいいから挑戦してくれと嘆願され渋々引き受けることになった。

今までの経験と反省を活かし警備がもっとも手薄になる厳冬期の夜を選び、5才女兒、7才男児を連れ12才のゲレックをリーダーにどこからともなく集まった16人のパーティーとなり決行（1990年冬）。ナンパ・ラを越えてロールワリンへのルートは通報の恐れがあり、より東へ進



ラサ〜カトマンズの地図（紅色の太線・破線が亡命ルートと推定される。エベレストは図の中央下にある。）



冬の黄河上流と河岸にあるムラ

んだ。どうやらチョーオユーBC→ポゼ・ラ→ロンシャル・チュ谷のコースを行くつもり（渡部同定）であったようだが、どこかでルートを間違えたらしく広大な高原を行った。やがて急な斜面となり歩けなくなった7才男児を背負い、5才女児の手を引き、暴風雪の中、ビニール袋で靴を包みラッセルをして進んだ。途中食料のツェンパ（麦焦がし）が尽きてしまった。あると思っていた食糧を仲間が落としてしまっていたのだ。そこでヒマラヤ越えに失敗し凍死している人の荷物を探ろうと提案するがチベットでは遺体に触れることはタブーであり誰もしようとしない。僧侶のゲレックが亡骸の荷物を探り、出てきた食料で食い繋いだ。ヒマラヤを越えネパールに下ると今度は急峻なゴルジュ帯に悩まされたが、ついに人里に到達した。1991年正月であった。

現在の登山家でも困難なことをチベットの田舎の少年たちがやっていたということは奇跡である。ルートは未だにはっきりしないが、ゲレック氏にシシヤパンマの写真を見せるとたぶんこの西を行ったというので、ランタン山群〜ガネッシュ山群のどこかを越えたものと思われる。

インド亡命後は南インド・カルナタカ州ムンゴットに再建されたチベット仏教ゲルク派のデプン寺やダラムサラのナムギャル・ゴンパなどで修行を積んだ。ある日故郷の恩師のラマが病気になったと情報が入り、会うためにムラに帰ることを決めた。カトマンズまで来て身を寄せた寺で恩師の訃報を知らされる。途方に暮れていたところボードナート寺院の近くにベロリン僧院を建立することとなり、それを手伝えることにした。仏像、壁画などラマの教えに従い、伝統教義に基づき忠実に再興することに責任者として腐心した。

寺は無事落成したので故郷に戻ることを決意し、一度インドのダラムサラに戻り法王に謁見してから帰郷することにした。ここで奇縁が続き運命の歯車が大きく動く。インドで独りの外国人女性に道を尋ねられた。その女性は日本人旅行者で偶然何度か遭遇した。彼女は帰国後も親切に対応してくれた彼のことを思い出して手紙を出しゲレックの寺に届いた。英語がわからない彼との間で寺公開の代筆文通が始まった。チベット仏教では戒律で妻帯はできず、僧侶である彼は恋愛や結婚など想像すらしていなかったので峻拒しつつけた。しかし高僧の示唆に富む言葉を広義に解釈してついに還俗。今は福岡で俗に入って俗に従い働き、家族とともに暮らしている。

【ゲレック氏の遊牧民支援活動】

日本で暮らすうちに日本の義務教育の制度を知り感動した。故郷の遊牧民の環境変化を見て、遊牧民にも教育がなければ現在の中国の中にあつては将来がないと思うようになった。

現在ムラにはおよそ 350 世帯程の人々が遊牧民として暮らしている。遊牧民の環境下では、子供たちが学校教育を受ける制度が成り立っておらず、一度も学校教育を受けないまま成人し生活しているのが現状だ。ごく少数の子供たちは、遠い地域にある学校に通うため、家族と離れて寮生活をしている。

ゲレック氏は 2010 年 11 月、ムラへの学校設立を実現することを目標とした会を発足。今まで 4 回の現地視察を企画し日本人に遊牧民の生活や現状を見てもらう機会を設

けた。そして、2015 年 11 月幼稚園を設立し、また、2017 年 9 月には小学校が一部開校し新入生を迎えることができた。ゲレック氏の提案の元、あくまでも地元の人々から中国地方政府に働きかけることで曲りなりにも教育がスタートした。また、厳しい冬には家を出る習慣のなかった子供たちのために、防寒着となる冬用「チュパ」を贈るプロジェクトを起こし、昨年新入生全員に寄付することができた。

今後も新入生のためにプロジェクトは継続し、資金だけを提供するものではなく現地の人々と共に模索しながら教育支援を行っていくとのことである。

日本山岳会福岡支部の皆様にもたくさんご支援をいただきました。今後とも是非ともご支援をお願いいたします。最後にゲレック氏の「チベット・ノマド 子供支援の会」のホームページ・アドレスを添付いたします。

<http://ncoamdo.com/>

－ 3. 輝かしい実を結んだ永年の活動 － パキスタンでの NGO と会員として －

2018年 フンザ「ハートゥ・ハートゥ」報告

No.14711

◇ 水野 公代

私が飼っているトイプードルの名前は“ビィビィ”といいます。「今日の散歩はどこまで行こうかねえ」とビィビィと出かけた先から帰ろうとした時、移動図書館のスケッチが目に入りました。

「このスケッチの移動図書館は本物があるのですか？」と聞きましたら「ありますよ」「どこに？」「福岡にありますよ」「福岡のどこですか？」「糸島ですよ」「糸島のどこですか？」「志摩中学校の前ですよ」「私見たいです」（私は福岡県糸島市志摩に住んでいます）・・・すぐに連絡をして下さったので私は、その足で見に行きましたら、在りました。私が描いていた移動図書館と全く同じのが・・・（人というのは同じ事を考えるものだとは再認識）。東日本大震災支援のため福島で作られた移動図書館ですが、熊本の震災支援で九州までたどり着き熊本へ向かうまでの間、福岡でチョッと休憩しているとの説明でした。

パキスタンの政治情勢が悪く現地へ行くのを控え、行けるようになるまで自分達が出来た事としてパキスタンの昔話の本【群青の天空に近い村】を作りました。この本が手元に届いたすぐ後に日本山岳会福岡支部の忘年登山後（2015. 11）の親睦会にて山本博先生や深田泰三さんが皆さんに声をかけて頂いた時は本当に大変嬉しかったです。そのほか紙芝居【ボーズヤの約束】、ウルドゥ語訳の本そして日本語の前文を英語訳した冊子などの制作が一段落した一昨年、外務省職員から講演の案内が届きました。私は東京の会員に出席を頼みましたがスケジュールが合わない

のことで、私が出席することになりました。

講演会で外務省の人が話されるには「パキスタンは以前に比べると安全になってきています」とのこと。周囲から「良かったね～」と声をかけられても私は正直なところ、すぐには信じられない心地でした。私の席の横はスズキ自動車会社の人でした。九州へ帰った後スズキ（敬称略）から「もっと詳しく聞きたい」というメールが届き私は浜松の本社へ行き、ハートゥ・ハートゥ（以後ハートゥと記します）が抱えている移動図書館の件を話しました。パキスタンのスズキ自動車会社（パックスズキ）と繋がる事になり後日、移動図書館の見積もりを出してくれるようお願いしましたら「見積もりは出しません。必要ありません」とメールにある。「エッ！」ダメなのか……。続いて「パックスズキが寄贈します」と記してあります。「エヘッ！！」。

10 年以上前に東京で、私がパキスタン駐日本大使の新旧入れ変わり時に招待して頂いた際、大使への挨拶順番が私の前後だった人に「大使と何を話されていたのですか？」と聞かれ、私は「移動図書館の話をしました」と答えたことがありました。後日パックスズキはその時の件を聞いていて知っていたとの事で不思議な縁を感じました。

移動図書館に積む書籍は、今までにパサー村やグルキン村へ寄贈続けてきた本に加え、これから移動図書館が村々を何回も巡るに足る書籍を購入したいと考えていました。しかし、想定外の事が重なり結局パックスズキの尽力とカラチの日本総領事館のご協力で、カラチにて書籍購入する事と製造途中の移動図書館も確認することが出来ました。二つの山場を越えることが出来て感謝でした。文章で記すると数行ですが・・・日記風に記すると何ページにもなります・・・。

現地へは私が日本山岳会会員になるための推薦人の一人であり日本山岳会福岡支部事務局長でフンザ地域へも何度も行っている渡部さんと「フンザへ行けるようになったら一緒に」という長年の約束を実行して頂く事になりました。私自身はこれまでになく安心して現地訪問が出来ました。私は英語が大の苦手ですが通訳も渡部さんにやって頂き、大変助かり感謝しました。ハートゥが発足した時から



ズーッと利用していた手描きの地図を見て、渡部さんから「これは僕が描いた地図です」と聞いた時には驚きました。

パスー村学校の図書室は三畳位で先生の後ろに見える橙色の籠にハートウで寄贈した本を入れ、近くの学校へ貸し出していると言っていました。現在では多くの本が収まった図書室（右下の写真）に成長していて本当に良かったと思いました。



ギルギットにパスー村から青年が移動図書車の運転手として付き、一緒にパスー村へと出発しました。途中数年前の水害で山が崩れ湖が出来ている所で休憩した時、運転している青年が移動図書車の側面の写真を指差して「これは僕です」「マー！成長したこと・・・」と一同が驚きました。



無事にパスー村に着き、さっそく荷を解き女性センターに寄贈するロックミシンを見て「私のロックミシンと、このロックミシンは違う！解らない」との事。他の会員たちが説明書と首っ引きで見事に使えるようにしてれました。翌日には、村の若い代表女性三人に使い方を教えていて「凄い！！」と感心しました。



ギルギットで受け取った移動図書車に書籍を段ボール箱から取り出して図書車に移していて・・・棚がたわみ・・・本が置けない状態だったのを、井上さんと村が他の村から呼んだという大工仕事が出来るといふ人と二人で奮闘して

無事に書籍の重量に耐える棚にしてくれました。凄い！！



広場に村人が集まり、10歳位の女の子のお祈りからセレモニーが始まりました。次から次へと大人の演説やら子供たちの歌や移動図書車の利用の公開討論やがあり、移動図書車のキーの受け渡しでセレモニーは無事終了し、皆が喜んでいる様子を見て「ホッ」としました。セレモニー後には懐かしい人々とも会え、支え続けてくれたと人達と発足時に「援助し過ぎないようにしよう」「後々までニコリ笑える活動にしたいね」と話したのが実現出来たのかな～と思い、そして私が内心で願っていた「周辺の村へも巡回したい」と言って頂いたのが何よりも一番嬉しく思いました。



次に、水撃ポンプがどうなっているのか？と設置したギルチャ村へ見に行きました。水撃ポンプは見当たりません・・・水害で流されたとか・・・ガッカリしている時、青年が近づいてきましたので「昔ここでヤーリィ ヤーリィって水撃ポンプの長いパイプを運んだ事がある」と私がポツリと私が言ったら「僕はヤーリィヤーリィと掛け声を出してパイプを運びました」と言うので写真を出して見せましたら写真の中の子供を指さし「これが僕です」との



事！あの時手伝ってくれた青年でした。ヤーリイ ヤーリイとは“おおきなかぶ”という絵本を私がウルドゥ語訳で読み、人形劇でもやっていた話の中で、カブを引っ張る時「ヤーリイ ヤーリイ」との掛け声が当時はやったのです。



廃れ始めていた伝統刺繍を「教えて欲しい」と言われるようになったと女性は喜んでいました。



洋裁技術を取得した娘たちが、他の村へお嫁に行き重宝がられていると喜んでいました。



バスー氷河から引いた水道が「長い間この地域の重い荷物を降ろしてくれた。日本にお礼を伝えてくれ」と村人たちは喜んでいました。中央の女性は筆者。

パキスタン日本大使館の草の根基金で造った全長 600メートルの護岸工事の最後に「水との戦いは、ここに住んでいる俺たちの宿命だ！」と一人の男性が仁王立ちになって言った時は「重機があったら村人の労働も護岸のもちも違っただろうに・・・本当に悔しいな～」と思っていました。今回の工事で完成した立派な護岸は無惨に壊れていま



完成した当時の護岸堤

した。しかし目的であった水の流れを変えるという役目は果たしたんだと自らを慰めています。

- 次に、活動を振り返って印象に残る会話を記してみます。
- ・ハートゥのメンバーが病気になった時、村の男衆が隣の部屋に控え「水野心配するな。人は誰だって病気になる自分たちが付いている」と言ってくれた事（この時はヘリコプターの手配までしてくれた）。
- ・私が悩んでいたら現地の人々が「水野は船に乗っていれば、自分たちが漕ぐ。水は上から下に流れる。同じ所に到着するから大丈夫」と言ってくれた事。
- ・「ハートゥ・ハートゥ」は来る度に人々との鎖が丈夫になってゆくと言われた事。
- ・何もなかったのに「ハートゥ・ハートゥ」が色々残してくれたと言われた事とか色々思い出しました・・・村人達が喜んでくれているのに対し、私が感謝したいくらいです。

振り返ると、私自身は英語も出来ない・知っている事は少ない・口先で喋っているだけ・・・何のお返しも出来ない・・・ナイナイづくし・・・こんな私に協力して頂いた方から「楽しかった」「関わらせて貰いありがとう」と言われ、私は皆さんの方がどんなに大変だったかを想像し、返答に困り言葉が出ませんでした。・・・・・・感謝以外にないと思っています。

「ハートゥ・ハートゥ」が掲げていた【“夢” 移動図書館を走らせる】がお陰様で実現出来ましたので、幕を下ろしたいと思います。

それにしても「山が好き」とスタートしたはずなのに、肝心な（山中ではなく）山登りみたいなことは一度しか経験せず今に至ってしまいました。



PAMIR TIMES

2018年9月19日 2:28

Photos: Saeed Akbar

翻訳を見る

The Hath Hath Mobile Library, sponsored by Japanese citizens and the Suzuki corporation, is a project working in Passu and Ghulkin village of Gojal Valley, Hunza.

The mobile library has over 3,000 books for students from primary to university level.

The project has been conceived and implemented by youth from Ghulkin and Passu. A joint committee has also been formed to smoothly operate the mobile library.

This is the first mobile library launched in the region.



地元の新聞に紹介された「ハートゥ・ハートゥ」の活動

会員50年にあたって

No.6486

◆ 太田 五雄

昨年の12月1日、日本山岳会年次晩餐会が新宿の京王プラザホテルで開催された。参加者500人を越える盛大な催しで、福岡支部からは高木荘輔支部長、中村正義氏に私の3名が参加した。

晩餐会には例年参加の依頼を受けていたが、何分にも福岡、屋久島と遠方での生活であったがために参加を辞退してきたが、今年は会員50年の永年会員の顕彰を受ける事もあり、また、一昨年東京に近い長野の小諸に移住したこともあって参加することになった。

日本山岳会入会のいきさつは、当時地図の空白部であった屋久島の地図作り、地域研究を進めていた事と、一方福岡の岳友も含めて、全国の山岳会がこぞってヒマラヤへ挑戦している時代で、当然私もヒマラヤへの夢を絶ちがたく、この二つのテーマを生涯の生きがいとして活動することを心に誓っていた。

屋久島に関しては松本徂夫先生（元福岡支部支部長、山口大学名誉教授、第9回秩父宮記念山岳賞受賞）に師事し、ヒマラヤ関係では深田久弥先生の影響を多々受けていた関係、両先生の紹介を受けて1965年5月日本山岳会に入会することになった。



左：永田岳（1886m）、右ネマチ峰（1814m）

日本山岳会は明治38年に創立された国内最初の山岳会で権威ある山岳会としてご高名なクライマーを多く輩出してきた実績などから、入会にはそれなりの登山実績や考え方がしっかりした者しか入会できないという気運があり、当時地方からの入会は非常に難しい時代であったと記憶している。私みたいな若輩者がご高名な両先生のご紹介をもって入会することができた事は、以後会員として恥じない行動を心がけねばと常々考えてきたことでもあった。

地域研究とヒマラヤという2つのテーマは屋久島関係の著書11冊、ヒマラヤ関係3冊を出版し、ほか短編の著作や関係著述32点を執筆した。日本山岳会と両先生に何らかのはなむけができたのではないかと思います。

考えてみれば、日本山岳会員として何ら問題もなく50年もの間安定した社会情勢、経済的に潤った環境に恵まれ、好きな山や自然と対話できたことは、何事にも代えがたい



谷川岳・衝立岩



1968年 キナバル山・ツクシピークの登頂

人生の宝物として感慨深いものを感じている。

振り返り見ると、若かりし頃は岩登りに明け暮れ、英彦山望雲台、阿蘇高岳鷲ヶ峰、冬期大山屏風岩、別山中央稜、屋久島本富岳南壁、前障子岳南西稜、障子尾根、ローソク岩、各溪谷遡行、谷川岳衝立岩、烏帽子奥壁、穂高岳屏風岩、積雪期前穂高東壁、滝谷、積雪期北岳バットレスなど果敢に挑戦した当時を思い出す。

一方海外では、1968年、しんつくし山岳会海外登山研究会（後の福岡GCC）のボルネオ島・キナバル山塊のツクシピーク（4010m）初登頂、ヒマラヤでは1971年、ヒマラヤ・ロールワリンからテシラブチャ峠を越えてクーンブ地方の偵察、1973年の我会（福岡GCC）8名による2ヶ月半にわたるランタンヒマールの踏査活動、及びドラグマルポ・リ（6204m）登頂、チュスムド・リ（6602m）試登、1998年には日本山岳会福岡支部の西チベットの最高峰ナムニ峰登頂、カイラス巡礼など行なった。

私的にはチベット東部6回、パキスタン・カラコルム2回、ネパール各地15回の踏査及びトレッキング、アフリカ・ケニア山、キリマンジャロ登山、屋久島の酸性雨調査の一環として韓国冬期漢拏山での調査登山2回、雪岳山、智異



1973年 ランタンヒマール
背景左：ドラグマルポ・リ、右：チュスムド・リ
（前列左より2人目が筆者）



1986年 タルチェンからナムナニ峰(7694m)
日本山岳会福岡支部発足40周年記念登山

山での登山、中国環境局と北九州国際技術協力協会の合同チベット長江源流調査隊参加、大気、水質、土壌などの環境調査、ボルネオ2回、ほか私的旅行ではイラン・ザクロス山脈、東南アジア・シンガポール、マレーシア、タイ、香港、台湾などの旅を楽しんだ。

会員としての50年、若かりし頃心に誓った二つのテーマを、満足いく形で遂行してきた私の山の人生を振り返ると感慨深いものがある。そこには恵まれた環境と共に私の半生に惜しみなく協力してくれた多くの岳友に感謝せずにはいられない。

これからも会員として山や自然を対象に、美味しい酒をたしなみながら岳友と語りあいたいものである。

— 4. 特別寄稿 石原 國利氏の対談録 (聞き手：田村 嘉勝) —

石原國利 会員 (No. 5180) の対談を転載するにあたって：

何事にも歴史をひも解いてゆくには、歴史を動かした当事者が書いたり、話をして記録に残った一次資料が重要である。いくばくかのチベットや辺境に関する探検史を説いてきた編集子には、古い時代のことだけに一次資料の検索と選択に多くの時間を割いた覚えがある。歴史は時を経るほどに後代の「解釈」が紛れ込む宿命をもっている。それゆえに、限りなく史実に近いことが早く公に記録としてきちんと整理され、多くのひとの目に触れることが正しい歴史を理解するうえで非常に重要な矯正材となる。

ここに掲載した石原会員の対談録は日本の山岳史上有名な「ナイロンロープ切断」事件の当事者の記憶をとどめた貴重な一次資料である。小説家井上靖の研究会を主宰される田村嘉勝会長とご本人の許可をえて、雑誌「井上靖研究」第17号(2018)より86～101ページを転載させてもらった。お二人に厚くお礼を申し上げる。石原会員は東海支部所属だが、福岡市近郊にお住まいで福岡支部の活動にはいつも御協力いただいている。(編集子記)

石原國利氏「井上靖先生－想い出すこと－」

◇ 記録：宮崎 潤一

司会 本日は皆さんご存じの石原國利さんに、「井上靖先生－想い出すこと」の題目で、田村会長のインタビュー形式で始めたいと思います。

本日、石原さんが貴重な資料をたくさんお持ちいただきました。その中で、大変有名な「氷壁」の「ナイロンザイル事件」という「氷壁」の最も貴重な資料となった本をお持ちいただいたんですが、かなり時間も経ってまして触ると崩れるような部分もあるかと思います。こちらの資料、全てお話の後、ご覧いただいて構いませんが、「ナイロンザイル事件」については、遠くから見ただけ、触らないでお願いいたします。

それでは田村会長、お願いいたします。

田村嘉勝会長 (以下、田村) 初めから注文を申し上げて申し訳ございませんけれども、とにかく貴重本でして、透明の袋に入っておりますが、この形でご覧いただければと思います。これから始めたいと思いますが、井上靖研究会が、こういう企画を組んだのはこれで4回目になります。

生前、井上先生というよりも、研究対象として語りますので、井上靖と言わせてもらいますので、了解いただければと思います。生前、井上靖とかかわっていた方々に、是非これは記録として残しておかなければいけないのではないか、というふうなことで、今回4回目ということ

で石原さんに来ていただきました。

このプリント、皆さんのところに行ってると思いますけれども、とにかくですね、石原さんは先ほどお話ししましたが、魚津恭太の、モデルでありまして、私も、本当にここに石原さんがいらっしやるということ自体がですね、不思議だなあというのを気もするんですけど、実は数年前に立命館大学でこの会がありました時に、やはり石原さんがおいでになりまして、最後の懇親会まで参加されたということがございました。事務局長とどなたに今回しようかと話しまして、とにかく石原さんにおいでいただかなければいけないのではないかとということで、昨日、九州博多の方から、奥様といっしょにこちらの方へいらっしやいました。

それでは流れとしまして、まず、私の方から大体60分程度、石原さんにご質問いたします。石原さんの方から自



由にお話しして頂きたいというふうに思っております。

それでその後ですね、皆様の方から質問を含めてお話しを頂きたいと考えております。よろしく願いいたします。

それでは石原さんよろしく願いいたします。

田村 石原さんは「氷壁」の主人公魚津恭太のモデルとして知られますが、初めて井上靖さんとお会いした時の思い出についてお話ししてください。

石原國利氏（以下、石原） 初めまして石原でございます。普段は文学とは全く離れたことをしておりまして、町の一介の一市井人にすぎませんので、先生と言われると身が縮む思いがするような自分です。どうぞお許しいただきたいと存じます。

井上靖先生とのつながりについてのお尋ねですが、私は学生時代、登山に熱中しておりまして、とにかく登山が全て、というような生活を過ごしておりました。

山になぜ登るかというようなことをよく尋ねられますけれども、登山というのも非常に時代とともに変転しておりまして、最初にアルピニズムというようなことを言われるようになりましたのは、ヨーロッパからなんです。これは最初の大きな目標はエベレストが目的だったんですね。エベレストの頂上に人類が到達できるか、ということが目的で、これにイギリスが1921年にとりかかりまして、1953年に33年かかって頂上に辿り着いたというようなことで、その思想が日本に、槇（まき）有（ゆう）恒（こう）さんがヨーロッパから帰ってこられて普及されて、日本でも「困難を克服して山に挑む」というアルピニズムという思想が、特に若い人の中にも興ったわけです。

まず頂上に辿りつくということが第一目標でした。

頂上が登り尽くされてしまいますと今度はもっと難しいルートから登るというような流れが起きたわけで、それら難しいルートから登られると、今度は最終的には岩壁を登るということが一つの目標になってきたわけです。

ヨーロッパではアイガーの北壁というものがございます。これは何十人という人が死んだり怪我をしたりしています。日本でも谷川岳というのは、これはもう200人近い人が岩壁で遭難して亡くなっているような事態にまでなってきた、私どもが登っていた時代は、難しい岩壁をどうやって登るかという時代でした。

私たちが目標としました前穂高の東壁という、非常に高度差のある岩壁があるんですけれども、これは夏場は登られておったんですけれども、雪の付いた冬に完登した人はいなく、途中で横道に逸れて頂上に達したという人はいらないうけれども、真っ直ぐ登ったという人はいないということで、私たちはそれを目標に前穂高に取り組んだわけです。

その時に起きた事故がこのナイロンザイル事件ということなんです。起きたのは昭和30年の正月なんですけれども、昭和29年の暮れから穂高に入りまして、30年になって岩壁にとりついたわけなんですけれども、その時に使ったのがナイロンザイルというザイルなんです。岩登りをする場合は、身の安全を確保するためにザイルを使って登らなければなりません。

墜落したときに止まるようにザイルで止めるわけです。

それで登山技術がそれについてあるわけなんですけれども、私たちが従来の登山技術を元にして、ザイルを更に進化させた道具として、ナイロンザイルを採用したわけなんです。ナイロンザイルというのは戦後、昭和20年（1945）以降、使われるようになったザイルでして、これはナイロンという繊維ができて、全ての性能が優れていると、引っ張る力はもちろんのこと、軽くて凍らない、それからどうい場合にも対処できる柔軟性があるということで、ナイロンのザイルは採用されて来たわけです。最初にそれを使ったのはフランスのアンナプルナ隊です。

世界には8峰の8000メートル級の山があり、これジャイアンツと呼んでいますけれども、1950年にこれを最初に登ったのがフランス隊です。フランスの優秀なガイドを集めてネパールに遠征隊を出して、頂上に達した。その時に使ったのがナイロン部隊と言われ、ナイロンザイル、ナイロンのテント、ナイロンのウインドヤッケですか、そういうのを使った隊でした。日本でも、マナスル隊がこれを採用しまして、昭和28年（1953）マナスルの頂上真近に達するということだったわけなんです。それで国内におりました私どももナイロンザイルをということで、当時非常に高価だったんですけれども、求めて、初採用というときに発生した事故なんです。

私どもは昭和30年（1955）の1月1日にベースキャンプを出発しまして、前穂高岳東壁に取りついたわけなんです。頂上直下で日が暮れてしまいまして、ビバークと言いまして、緊急宿泊、岩棚に座ってツェルトザックという簡易テントを被って夜を過ごすというような過ごし方をして、翌朝、2日の日に再度登り始めて、本当に、登攀終了点まであと7、8メートル、もうちょっとで頂上間近だということで、先頭の若山五朗君が上に出ている岩にザイルをかけて、上にあがろうとしたんです。足を滑らせてもザイルをかけてますから当然止まる。当然なわけなんですけれども、その時にザイルが……、私、2番目でザイルを確保しておったんですけれども、私に衝動が全く伝わらずに、ブツンともう、本当にあっけなく切れて、若山君は岩壁の下まで落ちていったということが起きたわけです。

これは登山界でも大問題になりまして、私どもはナイロンザイルが切れて遭難したということを発表したわけなんですけれども、現場の関係も詳しくこういう位置関係であったというようなことも発表したわけなんですけれども、登山界ではナイロンザイルは果たしてそんなに弱いものであろうか、そんなにあっけなく切れるものであろうか、というようなことが問題になったわけです。

ところが我々が調べてみますと、私たちと前後して合計3件、穂高でナイロンザイルが切れておったわけなんです。

最初に切れたのは29年の末に慶応大学の登山クラブ、山岳部でなく、東雲（シノノメ）山溪会という登山クラブの方たちが同じ穂高山系の明神岳というところを登っていて、ナイロンザイルが切れて、一人重傷になって、しばらく意識不明だったというような事件が起きています。それから私たちが事故を起こしたということを知って、救援に駆けつけようとした大阪市立大学の山岳部の方も、救援行動中にスリップして、ナイロンザイルが切れて雪だまりに落ちて、この方は大した傷も受けずに助かったと、続けて3件、ナイロンザイルが切断するということが起きたわけ

なんです。それで私どもは当然、弱いと…、非常に欠陥があるんじゃないかと…、こういう3件とも岩角に掛けた場合に切れてると、だから強いと言われているけれども、岩角に対しては非常に弱いんじゃないかという疑問を登山界に提出したわけなんです。

ところが登山界では、果たして弱いんであろうかどうかというようなことが議論になったわけなんです。その時に日本山岳会の関西支部長で大阪大学の教授の篠田軍治という方がいらっしゃるわけで、この方の監督で、ザイルを作った東京製綱で公開実験をしますということを発表されて、これが、その年の4月29日、東京製綱蒲郡工場の中に大きな鉄製の櫓が建てられまして、公開実験が行われました。

公開実験の結果、やはりナイロンザイルは切れない。麻ザイルより数倍強いという結果が出たわけでございます。

そして、私共が発表しました、切断時の位置関係、すべて再現しましたけれども切れないと。それから麻材のザイルとの比較。やはり実験されましたけれど、やはりナイロン製は麻材より数倍の強度をもつということが大々的に発表されたわけです。新聞・山岳雑誌すべて強いんだ、優秀なんだということが公になりました。

それで、私たちの言うことはまったく否定されたという事態になったわけです。

ところが私たちの山岳会の会長は、亡くなった若山五朗君のお兄さんで、石岡繁雄さんという方ですが、名古屋大学の工学部の第1回卒業生なんです。この方がそんなはずはないということで、ナイロンザイルの岩角についての性能について名古屋大学の協力を得ながら、その結果鋭い岩角には弱いということがはっきりした形で把握できたんです。

そして、東京製綱の実験を指導した篠田軍治博士の発表に対して「いままでの発表では次の事故が発生する心配が非常に大きい。だから公開実験の結果は誤りであるということを発表してほしい」ということを再三、お願いしました。それからだんだん要求という形でいったわけなんですけれど、誠意ある回答が出ない。ということで、私たちは、今迄のいきさつをすべて網羅した資料集といった、それが「ナイロン・ザイル事件」という、これが当時のものですけど。これは当時のガリ版刷りなんです。印刷代もなくてガリ版刷りの印刷で作りました。200部作って100部くらいを各新聞社、それから山岳雑誌社なんかに送りました。今はもうこんなボロボロになってしまって、非常に貴重品になってしまって…。

これを編集した石岡繁雄さんの生誕100年記念展を今、上高地でやっているんですが、8月いっぱいやっています。それでそれを機会にこれを活字化したものがこれです。これは保存のため、僅かだけ活字化してつくったという状態です。あとでご覧になってください。

そういうことがありまして、ナイロンザイル事件という、これが「氷壁」の出発点なんです。

このお送りしたという1冊を、三笠書房の編集長の長越茂雄さん、別名安川茂雄さんが井上先生に「こういうことがおきてますよ」と「ナイロン・ザイル事件報告書」をお見せになった。

井上先生が「これはおもしろい是非、当事者に会ってみ

たい」ということをお話になった。この本の「ナイロン・ザイル事件」を編集した石岡繁雄さんは当時、名古屋大学で事務官をなさっていました。

日本育英会がありますね。日本育英会は当時まだ日本の貧しい時代で育英資金をもらうことが非常に困難な時代でした。育英資金を取得するのも競争でした。それで一番公平な決定の仕方ということを石岡さんが論文化して発表された。文部省が長いこと研究して「一度話にきてください。」ということで、育英資金関係の国立大学の関係者を全部集めて講演会が行われました。

石岡さんが上京されるときに「東京へ出るときに長越さんから井上靖という作家に是非あって欲しい。という依頼がきている。だから石原君も一緒に行かないか」と声がかかりました。当時私は学生で東京にいましたので、「じゃあお伴します」ということで、まず長越さんとお会いすることになりました。

三笠会館（銀座5丁目）というレストランがありましてそこで落ち合うということになりました。一緒に行きまして私はもちろん石岡さんも長越さんとは初対面であつたけれど石岡さんと長越さんは、方や穂高、方や谷川岳の第一人者ということでお互い文通もあるし知り合いでした。けれどもしかし、顔を合わせるのは初めてだったらしいので…それで会館まで行きまして「井上靖さんが君たちに是非会いたいといっているいまから行こう。」と言われて「ええ結構ですよ」ということで三笠会館からタクシーで…。そのころは井上先生は大井町にいらっしゃいましたね。大井町まで行って初めて井上先生に会いました。昭和31年9月の暑い時期でした。「ナイロン・ザイル事件」の本が出たのは昭和31年の7月ですから、9月頃だと思えます。それで井上先生に初めてお会いしたとき、そのとき井上先生が「この資料に関心を持っている。これを小説の材料として使わせて下さい」ということを私共におっしゃいました。それで私共は「事実が曲げて書かれなければ結構です、どうぞお使い下さい」ということで了承したわけです。「じゃあ事実関係を色々お聞きしますから」ということで、私ちょうど学生で世田谷に下宿していたので、「石原君話をきかせてください」ということから色々交流がはじまった次第でございます。

ちょっと長くなりましたが以上のようなことでございます。

田村 石原さんは、井上靖が「氷壁」を連載中、しばしば取材を受けたと伺っていますが、井上靖は、石原さんに主にどのようなことをお尋ねになりましたか。取材中の井上靖についてくわしく教えてください。

中でも井上靖にナイロンザイル事件についてどのように話されましたか。特に印象に残ったことがあれば教えてください。

石原 井上先生にはお会いして、事実関係から説明することからはじまったのです。井上先生は、最初に私に対して、「私は登山のことは、全く何もわかりません。だから、すべて教えて下さい」と言われました。そして、大学ノートを広げて私の言うことを逐一メモされておりました。中には絵を描いて「これでいいですか」ということを

確認しながら、作業を進められました。

私まだ学生で九州から出てきて世間のことを何も知らない。だから長越さんが井上先生のことを「先生、先生」とおっしゃるんで、作家の方に会うのは私は生まれてはじめてなんです。作家の方を先生と呼ぶのも知らなかった。先生といえば学校の先生かお医者さんくらいしか呼んだことない子供だったんです。長越さんが「井上先生、先生」と呼んでらっしゃるので…。どう呼びするのか戸惑っていました。

それから井上先生の私が知っていることを聞き取る作業の進め方は学者と一緒にだったような気がしました。すべてを記録して、それが間違えがないように確認をして、特にきちっとされる。というようなことから、すばらしいお方だということで私も自然と先生、先生と呼びするようになりました。そういう関係でございます。

田村 石原さんは「氷壁」連載終了後も、ともに穂高岳に登る「かえる会」などで井上靖と交流が続いたと伺っています。「氷壁」連載終了後の井上靖との交流について、特に登山中の井上靖の行動について印象に残ったことがあればお話しください。

石原 『氷壁』が昭和31年の暮れから朝日新聞に連載され、昭和32年5月に終了してこれが一冊の本になりました。これが、初版本です。あと、朝日新聞の連載中の挿絵を生沢朗先生が本になさっている。そういうようなことで、連載がおわってからしばらくはもう、先生にお会いすることなくて、そのままになっていたんですが、あるとき何かのきっかけで「穂高に行きますけれど一緒に行きませんか」というお誘いが先生の方からありました。それで何人かの親しい山の仲間を誘い出して「じゃあお伴します」ということで行き始めたわけなんです。

どうして「かえる会」かといいますと、この『氷壁』の中で、穂高に明神という地域があります。そこで、春が終わって蛙が地上に溢れるようになる時のことを描写してあるのですが、それをもとに「かえる会」という集まりができたというようにお聞きしました。私共が参加したのは2・3回目ころのことだったと思います。

それで山の中の井上先生はどんなだったかという、非常にくつろいでおられました。仕事を離れてくつろいでおられるということとはよく分かりました。

徳沢園という所へ泊まってから涸沢というところまでいつもお伴したわけですが、途中坂がきついわけですね。井上先生は腰に手をあてゆっくり登りながらけっしてきついとか弱音を吐かれませんでした。それはいつも感心していました。みんなきつそうに「あー、きついな、きついな」ということをおっしゃっていましたが、先生は腰に手をあててゆっくり黙々として登っておられました。それが非常に印象に残っています。

田村 1971年これは昭和46年の9月から10月にかけて、石原さんは、井上靖のネパール・アフガニスタン取材旅行に同行されともにヒマラヤ山地へ脚を踏み込まれています。そのヒマラヤ旅行の際の井上靖との思い出についてもお聞かせください。

石原 先ほど話しました「かえる会」の山行で非常に親しくなりました。忘年会にもご招待いただいたりしています。それでそのあと是非家に来てもう一度飲もうと誘われて、二次会、三次会と深夜までお酒のおつきあいをさせていただきました。

その時に井上先生が「山はいいな、ヒマラヤなんか行くといいな。」なんていうことをおっしゃっていましたので、私共が、昭和46年にヒマラヤ行きを計画したんですけど、先生に「今度ヒマラヤで月見をするトレッキングをしよう」と計画しております」というようなことで計画の概略を話しましたところ、「うーん」といって黙って聞いておられました。そして「一日考えさせてくれ」ということがあっておわかれたわけです。

翌日になりますと私共に電話がありました。「私も行きます」というお言葉でした。私共もまさか井上先生がヒマラヤまでおいでになると思わなかったので、我々は大慌てで慌てたわけです。これが先ほどの日程の昭和46年の9月末から10月末までのことです。このとき井上先生は「ヒマラヤ行く前にシルクロードのアフガニスタンに寄りたい」ということをおっしゃったわけです。シルクロードのことに關して私どもはまったく無知でした。それで私共の山岳会の友達に「井上先生がアフガニスタンに寄りたいとおっしゃっている」ということで、丁度私の友人にナジブ・モハバット君がいました。

ナジブ君と呼んでいます。アフガニスタンから来た留学生で名古屋大学の卒業生です。ナジブ君に同行をお願いして快諾を得ました。私は大学を出てすぐ、名古屋大学の学生部に事務官として就職していたわけです。どうしてかという、先ほどの石岡繁雄さんから私が大学卒業するに際して「ナイロン・ザイル事件はまだ終了していない。われわれはそれにむけて膨大な労力を必要とする。また私達の山岳会である岩稜会が『穂高の岩場』という初めての写真によるガイドブックを作成中で、これに手がいるから、名古屋大学に勤務しないか。」と言われました。その一言は私には絶対命令のようなものだったものですから私も、「はい、わかりましたそのとおりにいたします。」ということで名古屋大学に勤めて居った次第です。

田村 井上靖は、日頃自分の作品について話すことはありましたか。また執筆中の作品のことや、構想中の作品について話をすることはありましたか。それぞれ、もしあればどのように話していたか。教えてください。

石原 二次会三次会で酒が進みますと先生は非常に能弁になられます。普段はあまりお話にならないが、進んでいろいろなことをお話ししてくださいました。そのときにいろいろ、これから書こうという小説のこととかお話になっていたわけですが、これは、私どもの迂闊なことで、そのとき聞いた時は非常に感心して「あーなるほどなあ」というような聞きかたをしていた訳ですけど、感心したという思い出だけが残って、その内容については具体的にいったいどうだったかということを今思い出すことはまったく出来ない。本当にメモしておけばよかったと思うしております。

ただ、孔子のことはよくおっしゃってました。孔子はこ

んなこと言っているよ、これは真実を突いているとか、言葉の中心を見通したようなお話をしていられしやいました。が私の受け手の方が幼稚で十分なお応えができていません。ほんと、申し訳ないと思います。

田村 孔子について井上靖は周到な準備をしていましたね、私もずいぶんお話を伺うことはありましたけれど。

石原さんにとって「氷壁」とはどのような作品でしょうか。率直なご感想をお話してください。

石原 小説「氷壁」につきましては、私共の関心があったのは、登山行為のことだけ、ナイロンザイルが強いのか、弱いのかということをどういう風に表現なさるかということだけしか関心がありませんでした。

文学のことはまったく分からないので、判断できないわけです。文学の善し悪しについては…そういう幼稚な人間なんですけど。

登山行為に間違いが無いかナイロンザイルに対する判断に誤解がないかということだけが関心でございました。

登場する人物その他については、これはもう先生のお創りになった人物だというふうに割り切って考えています。

田村 最後に人間・井上靖の魅力についてお話しください。

石原 たとえば最初に先生とおよびした時に感じているように、とにかく物事を正確に把握する。そしてその中からどういうことを引き出すかという作業をなさるのを間近に拝見して、感心することばかりでした。そういうことです。

—質疑応答—

井上修一氏 よくわからないことは、大阪大学の工学部の教授がナイロンザイルが切れるか切れないかを実験をやったんです。公開実験を行いました。そしてその結果切れなかった。しかし、石原さんたちが滑落したということを知った登山グループの人たちがやると切れる。そうすると客観的に見て大阪大学の実験の時は切れないという。公開実験のとき大阪大学の先生が何か切れないような操作をしたとは思えないし、そうするとなぜ切れたんだということになる。失礼、なぜ切れなかった。もし、操作をやって仮に切った可能性があるとなると、不思議でぼくにはナイロンザイル事件のことがはっきりしないことがあります。

石原 公開実験が起きて非難が私たちに集中したんです。切れないという方、それから偽りの発表をしたんではないかということに尽きたのです。

早稲田大学の山岳部の監督で、関根さんという方が「化学」という機関誌に「切れたということを書いていけれどもとんでもないことだ。ナイロンザイルは切れるはずないんだ、自分たちがビバークしたときにアイゼンで踏んで傷をつけたのではないかな。罪をナイロンに着せたい気持ちも分かるが…」といったことをはっきり書かれているわけで、まあそういうようなことで私たちのいうことが間違いだということを世間に広めるようになったわけです。

ところがですね。石岡さんのところに、手紙が来たりす

るわけです。それは、実験を公開した東京製綱の社員のかたからの「自分たちは良心の呵責に耐えられない」と。今でいえば内部告発です。それから繊維を提供した東洋レーヨンの研究者も「実験室でヤスリで実験した場合、ナイロンはそういう剪断力に弱点があるということがわかった。公開実験で切れなかったことが不思議だ。」というようなことがあるわけです。

そのときに公開実験では登山者を大勢呼び集めて実験しましたから、三重県の山岳連盟も役員の方は見学に行っていたわけですが、「どうもあの岩角、丸めてあったような気がする」というようなことをおっしゃるわけです。であとでだんだん調べてみると、実際に丸めてあったのですね。90度の岩角に対しては1ミリ、45度、まあ45度なんて普通、引っかけないですけれどね、そういう刃物のような45度の岩角については2ミリの丸みがつけてありました。

90度の岩角に対しては1ミリ、45度の岩角については2ミリの丸みがつけてあったことがはっきりしたわけです。実験すればその通りになるわけですね。丸くしてないと切れるんです。高さ10メートル位の檣の上で実験した訳ですが、それが、岩角がまさか丸めてあるなんて誰も思いません。

岩角に弱いんだということで、岩角で実験するんです。だから丸めてあるなどと誰も思わない。そのときは思っていなかった。だんだん調べてみると、丸くしていなければ公開実験通りの結果が出ない。ということが非常にはっきりしたわけです。だから私はこれは科学的に根拠を承知した上、切れない結果になるように作られて発表されていると…。

その後、だんだん積み重なってナイロンザイルは岩角に弱いと、穂高で使った8ミリの直径のザイルは、ザイルとして使ってはいけないということまで非常にはっきりとしたわけです。

これがその新聞記事に出ています、(資料提示)。登山用ロープの安全基準の制定です。これに採用されてナイロンザイルとしての公の規格が作られました。

これは石岡繁雄さんの大功績です。それ以来、岩角のものがっている事故はなくなりました。それまで、20人近く亡くなりました。岩角で…。

井上 僕が一番疑問に思っているのは。公開試験で切れないように、意識的に、意図的に角を丸めてたんですか。

石原 そうとしか考えられません。メーカーとの打ち合わせでそういう実験装置を作ったのですね、

井上 そのようにして切れない実験をしてそれは、誰のために、何の目的でしたのでしょうか。

石原 東京製綱としても当時日本最大、今は世界一のロープメーカーなんですね。それにしても登山で使うザイルなんて本当にサービスで作っているようなもので、売り上げからすれば、本当に微々たる商品なんですね。

ところがザイルのために自分たちの会社の新製品として売り出し中のナイロン・ロープが非難を受けるということは、耐え難かったんでしょうね。

ひっくり返してという気持ちがあったんでしょうね。当時の社長は「どんなことでもするから押し通せ」ということをおっしゃってたそうなんですけど。

その当時ナイロンは世界的に注目されていて、漁網に良いとされて麻のロープからナイロンに移っていったわけですね。漁網に使うロープの量は膨大で、東京製網の利益の大半を占めていたらしいです。「底曳き網」で魚を捕る人たちからもナイロン製の網は水底で使うと網がよく切れるという声が上がっていたそうなので、だから、「漁網まで被害が及ぶと大変だ」ということからナイロンは岩角に弱いという印象を消してしまえというようなことだったんじゃないかと。

これは、私共の推測なんですけど、そういう社会の状態でございました。

浦城幾世氏 直接的なことをお伺いさせていただきます。石原さんは若山五朗さんとザイルがつながっていました。そのナイロンザイルが切れて落ちた、その後、その切れ落ちた場所の山には登られたんですか。登ることはしなかったのですか。

石原 山登りは続けております。山登りをするとき、事件後もナイロンザイルを使いましたが、岩角には弱いということを承知した上で、鋭い岩角にかかるような使い方を一切いたしませんでした。

岩角にかかったらバサッと切れるんだと。

まっすぐ引っ張るのには強い。ということを知っていましたので。そういう使い方をしていました。

浦城 父が亡くなりましてから「かえる会」の方達が母を「徳沢園にお連れする」といって下さり、みんなで徳沢園にまいりました。奥又白の若山さんのお墓には、そのとき初めてお参りをさせていただきました。あれからあのお墓はどうなっていますか。そのままですか。毎年石原さんや兄の石岡さん、山の仲間たちがあのお墓まで登ってお参りをしていると当時聞いて感激したのですが。

石原 あれからどうなったということですね。あの場所にはあそこにある木を切って、そこに櫓に組んで、その上に遺体を乗せて焼いた場所なんです。そこにケルンを作りました。ただ、あそこは国立公園なんですね。国立公園の中にはお墓を作つてはいけません。だから、お墓でなくてケルンという呼び名で呼んでいます。

司会 黒田さん 1971年に一緒にネパール・アフガニスタンに行ったことがありますよね。その時の様子を話してください。

黒田佳子氏 石原さんがモデルの「氷壁」が掲載されたのは、私が小学生の頃。小説「星と祭」に書かれたアフガニスタン旅行に石原さんたちと一緒にいったのは、もう大学を卒業して数年も経った頃でした。父が突然「山の連中がヒマラヤの上で月見しないかと言ってきた。」と話してきて、その数日後「佳子、一緒に行かないか」と誘ってくれました。特別に惹かれたわけでもないのですが、そのまま

参加になりました。

カトマンズからプロペラ機で出発し、いよいよ霧のかかったヒマラヤの麓に着いた時、私当時日本で流行のミニスカートとハイヒールの格好でした。すると、直ぐに石原さんやって来て怖い顔で「すぐにその靴を脱ぎなさい」とおっしゃったのですよね。理由はなにもおっしゃらない。とにかく「そのヒールは脱ぎなさい」と。私のほうは「えっ、何で」という感じでしたね。

父は石原さんのことを、「あれほど冷静な人を知らない。」とよく言っておりました。「もっとも、冷静でなければ、命がけの登山ができるはずがないよ」とも。立派なリュックやアノラック姿で山に立っている父の写真は幾つも残ってはいますが、それは前後左右を親しい登山家に囲まれて案内されたからで、父は一人ではどんな山も登りませんでした。「素人は登山に安易に手をだすべきではない」これが父の信念でした。

ヒマラヤ登山旅行は私にとって貴重な体験になったのですが、それでも日本が舞台のはずの連載小説「星と祭」に、自分たちの旅行が挟まって書かれている唐突さにとまどった記憶がありました。

「星と祭」の題から推察すると、父の構想には初めからどこかの登山が設定されていて、どこかに行けたらよいかと望んでいた状態だったのでしょうね。それが山の仲間の協力で実現できたといった事情だったのでしょうか。

ヒマラヤ旅行の前半はアフガニスタンを廻っての旅でした。なんだか魅力的な青年がいるからと、石原さん紹介されたアフガニスタンの青年に父も好感を持って、結局、案内人として一緒にアフガニスタンを回っています。

東京オリンピックに彼が国旗の旗持ちで入場と聞いたのですが、本当ですか。

石原 それは初耳です。

黒田 私はそう思っていました。

石原 アフガニスタンでホッケーをしていたという話は聞きましたけれど。

入場式で旗を持って歩いたという話は私は聞いておりません。がそれはあったかもしれません。ナジブ君というのは、お父さんが初代の日本代理大使です。その人の長男で名古屋大学に留学しています。そのときの身の世話を私が学生部の職員でしたからしました。

食べ物などをすべて調べて、それで親しくなった。

それでアフガニスタン行ったとき、私が引っ張り出したんです。

是非ついて来てくれ、現地の交渉もお願いしたいと。ということで、彼は進んで参加してくれました。という関係です。

黒田 ヒマラヤ旅行が書かれている「星と祭」。毎日新聞に掲載されたこの小説は、子供を失った親の苦しみが続々と書かれているストーリーで、初めの数ヶ月は読者の反響一つ無く、新聞社が困っていたとの話を聞いています。

もっとも、琵琶湖の十一面観音信仰に触れる頃からは、多くの反響があり、琵琶湖の近辺にも訪れる人が増えたと

も聞いています。

娘の死に罪の意識を持ち苦しむ主人公も、日本から遠いヒマラヤで星や月を見つめるうちに、子の死も結局は運命だったのかと納得して、話は終わっている。特殊な内容のせいもあってか、この作品を読みながら、感想も言わず大切にこの本を持ち続けてくださるような読者が、思いがけなく多くいるのではと、気づいたのは父が亡くなった後のことです。

どの旅行でもいつも川に興味をもつ人でした。ヒマラヤにはドート・コシ、ポーテ・コシとかいう溪流が合流した地点があります。その時も、その傍らに立ってじっと見つめて、動こうともしなかった父の思い出があります。何にそんなに惹かれるのか不思議にも思いました。

あるとき、故郷天城の村に生活していて、川の合流地点にある自分の村は、他の村々とは違う特別な村なんだと思って育ってきた、との父のエッセイを読み、ああと思ったのです。他所のものにとっては何気ない地形や美しい風景も、その土地、その土地の人々には特別な思いが籠もる。そんな当然の事実改めて気づかされました。

司会 どうですか石原さん。注意されたということはありませんか。

石原 ヒマラヤ旅行から帰って、まもなくして黒田さん、結婚されましたよね。あの旅は井上先生からの送別旅行だったんだなあというふうに、後になって私は思いました。かわいくてしかたがないという気持ちが出ていました。

井上 「氷壁」を書いているときは中学生から高校のとき。昭和31年の4月から高校に行きました。父親はよくいってましたけど、「登山家の人たちにとってはたぶん石原さんや他の人もそうなんですけど、“ナイロンザイル事件”それが、大きなショッキングな事件で、ナイロンザイルに対するものの考え方と登山家の対応の仕方とかそこところきちんと質さなければいけない。また石岡さんにとってみたら、亡くなった弟の死を無駄にしない。いろんな思いがある。だから石岡さんの思いと、石原さんの思いと、私が調べる思いもある」だから父親は当初から「ナイロンザイル事件」そのものよりもナイロンザイルの切断を巡って小説を書きたかった。父親にとってはそこで滑落して死んだ若山五朗の死と、若山君を支えきれなくて、ナイロンザイルを意図的にナイフで切ったのではないかと、という石原さんが受けた誤解とか立場を使って中心にして小説を作ったんじゃないかと、私は思っている。

石原さんが受けた誤解とか、価値とかそういうものを使って「ナイロンザイル事件」を材料にしたんですね。小説家として、ただあのいろんな事があって、父は「俺は小説家で「氷壁」という材料を使って書いたのだが、本当に自分はこれでいいんだろうか」という気持ちがいっぱいあったのではなかったのか。本当の登山家とは思いが違う、紹介があって書いているのですが父親は「でもそれでいいのだから」としての迷いがあった。それが、一番売れた作品。売れ口のある作品の一つで、作品としては成功作だと思います。

石原 まだ、「氷壁」が小説になったころにはナイロンザイル事件は終了していない、結論は出ていない。特に私達は訴訟を起こしたりした相手の所行を告訴したりしてましたから。取り上げにくい材料ではなかったのか、それを材料に使っていただけた。小説の材料に使っていただいたことは、世間にはそれが知れ渡ったわけですから私たちには援軍になりました。

世論はまったく切れないじゃないかという声が強かったわけで、「ナイロンザイル事件」があるということを経験に知らしめた。ということは非常にわたしたちにとって援軍になっていました。石岡繁雄さんも「是非ともこれをきちんと結論を出さなければいけない」という、まあ支えになったのではないかと思いますね。

井上先生はどっちがいいとか悪いとか、そういうことはいっさいおっしゃいませんでした。ただ「氷壁」に出てくるザイルメーカーの名前がですね。佐倉製綱というんですよ、「さくら」といったら欺して売るときに「サクラ」のお客が買うというのではないのか、先生はなにもおっしゃいませんでしたけれどね。

我々に好意をもっていらっしゃったんだなあということを経験に感じました。

田村 20年くらい立った「過ぎ去りし日々」に「私は氷壁という小説の主人公を石原氏の立場においた。もちろん小説では事件と無関係な物語が展開していく。がその中でナイロンザイル事件を正面に据えて石原氏の立場で書いた」こういう風に振り返っているんですね、でいま井上修一さんのお話なさったことと絡めてどうでしょう。

石原 取材の過程でも私たちに対して好意的でしたね。ああそうですか、そうですか、自分のご意見はおっしゃらないです。私どもの言うことを納得していただいたということです。そうしたことを非常に感じておりました。

瀬戸口宣司氏 井上先生の小説は、事件を面と向かって扱わずに裏の方に流しながら使っている。「氷壁」もそうですし「下山事件」もそうです。「長崎の原爆」もそうですし他にもありますが、ちょっとした誤解を受けて、ストーリーだとか大衆小説というようなことが一部で言われている。ですから「氷壁」についても石原さんのおっしゃる、事件がまだ続いている中で、書かれている立場としてはやはりつらかったのではないかと思います。

ひとつ伺いたいのですが、涸沢から徳沢小屋まで、何時聞くらいかかりますか。

石原 徳沢からは登りになります。涸沢までは半日かかります。涸沢から徳沢へ降りるときは下りですから、足の速い人で3時間ほどでくだります。

浦城 「氷壁」は、父の作家生活の中で、一番忙しい時期に書いた小説だと思います。

たまたま、「ナイロン・ザイル事件報告書」(ガリ版ズリ)が三笠書房の長越茂雄さんの手に渡りました。長越さん自身、小説を書こうとされていた方なので、「これは小説になる」と思われて、父の所に早速届けて下さった。父はと

にかく、忙しい時期だったので、次の小説を考える暇も時間も何にもない状況。そこへ、小説になりそうな材料が来たので飛びついたのだと思います。

そこで、「これはおもしろい」、書くということで長越さんにお返事をしました。それで長越さん、石原さん、石岡さんの3人に井上家に来ていただき初めて石原さん石岡さんにお会いしたと聞いています。

そして「山のことはまったく知りませんので、すべて教えて下さい、ただ、ここにはロマンがないのでロマンを一つ加えてもよろしいか」と言われたと、石原さんが何かに書いておられた。

とにかく、考えるひまも時間も何もなくって、材料が来たから飛びついた新聞小説でした。

それからもう一つ、「氷壁」を書いている時に、私は、

父と何回か一緒に穂高へ登りました。当時の父は、ものすごく忙しく日常あまり歩くこともなく、自動車ばかりの生活でした。長越さんや山の方々が、つれて行って下さったから登れたのです。父はゆっくりゆっくり登りました。歩くのが精一杯な人が穂高へ登るのですからこれは大変なことでした。そして、ひと休みしては、「ああ、山がきれいだねー、見てごらんよ」とか言いながらちっと岩に腰掛けて、ひと休みしてまた登りました。

父にしてみたら本当に忙しく大変なときの取材登山でした。この頃はまだ「かえる会」が出来る前のことです。

田村 それではこれで終わりにしたいと思います。石原さん、長い時間、貴重なお話をありがとうございました。

5. 山行報告

ラサ今昔

No.10309
◆ 中山 健

ナムナニ登山（1998年5～6月）のあとラサを経てカトマンズに下った。5回のカンリガルボ山群の探査（2001年～2005年）ではラサは終着地または往復の基点であった。昨年（2018年）西チベットへのツアーに参加したさい、しばらくぶりにラサを訪れた。ナムナニから20年、第5回カンリガルボから13年の時がそれぞれ過ぎていた。

この間のラサの街の変わり様、中国化は大変なものであった。新しい市街が古くからの街の西、キチュの下流左岸に造られていた。鉄道の駅があり、中国人の居住用らしいアパートが立ち並んでいた。すべて中国風の建造物である。

ラサの古い街の核心、パルコルではマニ車を回し、数珠を繰り、真言を唱えながら巡礼する人の流れは相変わらずであったが、街の様相は変わってしまっていた。通りの両側にとろろ狭しと並んでいた出店は跡形もなかった。その出店には仏像の金、山さんごの紅、トルコ石の青緑などはなやかな彩りがあった（ものはすべてまがいものらしい）。

そして物売りの声、カセットから流れる音楽など喧噪な音にあふれていた。それらはすべて消え去り、パルコルは雑然とした路地から市街へと変容していた。消え去ったものの替りに現れていたのは商店の店先と屋上に翻る五星紅旗であり、濃紺の制服に身を包んだ武装警察官と彼らの詰所である。さらにパルコルに入るすべての者にパスポートなど身分証の呈示を課し、X線による持物検査を行う検問所が設けられていた。

ラサでパルコルとならぶ観光スポット、ポタラ宮の南側、北京中路と言われる大通りに接して「ポタラ宮広場」と名付けられた広場がある。ポタラ宮正面の全貌を一望に収められる恰好の場所である。かつては一角に土産物店が並んでいたり、物売りが居て「雪ひょうの毛皮はいらないか」など声をかけられたこともあった。それほど広くはないがどこからでも、誰でも自由に出入りできる広場であった。今ここは全体が柵で囲い込まれ、管理人の監視のもと

にゲートを通らなければ立入が許されなくなっていた。柵の内側も植込みと遊歩道が区画され気ままに散策できる場はあまり残されてはいなかった。

ラサは古い歴史を持つ都である。7世紀、チベット全土を初めて統一したヤルルン王朝のソンツェンガンボ王がラサをチベットの首都と定めた。その王国吐蕃は西のコータン、南のネパール、北の河西回廊、敦煌を版図に収める拡大な帝国を作り上げ、中央アジア最強を誇った。しかしその帝国も9世紀半ば分裂分解した。古代帝国の終焉とともにラサの地位も帝国の首都から一地方の都市へと落ちてしまった。

吐蕃王朝がインドから取り入れた仏教は中央権力による規制が外れると壊滅の危機に瀕したが王朝分解後の混乱が収束するにつれて仏教再興の動きが始まった。王朝時代伝来していた戒律が東チベット、カムから、そして新しくインド僧が持ちこんだ戒律が西チベット、ガリからそれぞれ中央チベット、ウ・ツアンに伝えられた。その結果多くの宗派が生れ、僧院が再建または創建された。それらの宗派は施主の有力氏族・領主から領地・農奴が寄進され豊かな経済力を持つとともに地域に対する政治権力をも獲得した。仏教宗派が封建社会を形成する重要な一環となったのである。

13世紀半ば北の草原から中央ユーラシアの覇者モンゴルが侵入して来た。モンゴルのカン（汗）たちは特定の宗派の施主となり、それに依存してチベットの支配を強めた。各宗派はカンの力を背景としてチベット内における自らの地位を固めていった。宗派とカン両者は、宗派が宗教的指導を行い、その見返りにカンは宗派を保護するという間柄であった。

数世紀にわたる宗派間の抗争をひとまず治めたのはモンゴルのグシ・ハンである。1624年ゲルク派のダライ・ラマ5世はグシ・ハンの援助によりチベット全土の聖俗の両大権を得て国家元首となった。やがてダライ・ラマ5世は吐蕃王朝の宮殿跡、マルポリにポタラ宮を営造し、そこから全チベットの統治を始めた。ラサは800年ぶりにチベッ

トの首都に返り咲いたのである。しかしラサの安康な状態は永くは続かなかった。宗主権を主張する清軍の占領、ヤングハズバンドの侵攻、辛亥革命にともなう独立闘争などラサをめぐる抗争は絶えまがなかった。

1950年中国人民解放軍が長江を渡河してチベットへ入って来た。1951年北京での17か条協定の調印によってチベット国の独立は完全に失われた。さらに1959年ダライ・ラマ14世の国外脱出によってラサは首都でもなく、信仰が収斂する聖なる都でもなくなった。ジョカン寺前で五体投地を行う人の姿、パルコルでの巡礼の姿がやがてなくなる恐れは杞憂であろうか。

【参考図書】

「チベット（上）（下）」山口瑞鳳 東京大学出版会
 「チベット史」ロラン・デュ 今枝由郎訳 春秋社
 「チベット文化史」D・スネルグローブ、H・リチャードソン 奥山直司訳 春秋社
 「ヒマラヤ東 岡日嘎布山群踏査と探検史」松本恒夫編著 辻 和毅・渡部秀樹著 権歌書房
 「中央ユーラシア史」小松久男編 山川出版社
 「清帝国とチベット問題」平野聡 名古屋大学出版会
 「チベット人・韓国人の思维方法」中村元 春秋社
 「チベット 聖地の路地裏」八年のラサ滞在記 村上大輔 法蔵館

New Zealand Mt.Cook 山麓のトレッキング

No.13316

◇ 松隈 茂

2018年1月13日（土）羽田をAir New Zealand92便・Boeing777で発って、Auckland空港には現地時間の12時40分に着いた。所要時間は約11時間、時差4時間（3時間+夏時間+1時間）であった。



Auckland～Christchurchの機内から

南島のChristchurchへの所要時間は1時間30分であるが、国内便への乗換は屋外に出て、緑線に沿って歩くこと20分、suitcaseを引いての移動だから大変だった。連絡busは30分間隔で、それを待つと乗り遅れるからで、とてもtightなscheduleだった。国内便のNZ46便は横7席

で左窓席だったので、Auckland～Christchurchの機内からは緑豊かな南島北部の平野を存分に眺められ、これがNew Zealandなのだとの思いに駆られた。16年前の2002年に登山対象として、New Zealandを候補に挙げたこともあったが、航空料金が¥45万円程でMt.Cook 3,754mとMt.Aspiring 3,033mの2つしか知らず、Mt.Cookでは雪崩で遭難事故も起きたので、安価なスイスに傾注し、1999年～2007年までの9年間に9回もスイスの山々を登った。



Mt.Cook 3,754m

さて、1月14日の夜の10時になって、漸く辺りが暗くなつて星空観測ツアーのバスで標高1,400mの高地に向かった。そこでは日本人の森田氏ほか3名が天体望遠鏡3台を据えつけており、私が最も興味のある南十字星を存分に見ることが出来た。森田氏の説明では、Micronesiaの人々は、それを頼りに航海しており、ハワイのMaui族も同様なコースを辿ったことだろうとのことだった。

このバスが出発したのは標高700mのTekapo湖畔のホテルからであったが、標高1,400mの観測所は周囲に明かりが無いばかりでなく、月の出ない時間帯が選ばれた。

今回のツアーで、Mt.CookはLake Tekapoの南岸を西に走る8号線をTwizelまで進み、そこからLake Pukakiの西岸を北上すると、Glentannerを過ぎてMt.Cook（Maui語ではAoraki 雲を突き抜ける山）登山口だった。しかし西岸の道路は起伏が激しく、左右に曲がっており、悪路で冬期は氷結し、滑り易いことが標識から分った。Mt.AspiringへはLake Wanakaの南岸道路を西に進んでから、北上するようであるが、道路幅は狭そうである。Mt.AspiringはMt.Cookの南西方向になるが、地図上で結んでも150km以上離れていると思う。クラブツーリズムのガイドの伊藤地香さんの説明では、New Zealandには2,000m以上の山は200位あるらしい。Lake TekapoのホテルPeppers Bluewater Resortのフロントで聞くと、Lake Tekapoの東の山は2,000mほどあるが、無名峰と言われた。

Christchurch空港に迎えに来て、4日間Clarks Christchurchの大型busを運転したのは65才のveteran運転手のOrmさんで、分離帯の無い片側1車線の道路を時速100kmで走っても安心して乗っておられた。1月15日（Mon）ツアー客19名とガイドがハーミテージホテルの横を10時に出発した。Mt. Cookの展望台まで片道1時

間2kmのトレッキングコースでKea Point Trackと言われる。最初は平坦なブッシュの中の木道を辿るが、最後は急な坂道になる。Mueller 氷河とMt. Wakefield、アオラキ山は目前にあった。Kea Pointの看板にはWarning: Keep to path. Delicate vegetation Unstable cliff edges. と書かれていた。



Mt. Cook (Aoraki) Mt. Wakefield

Hermitage hotelの標高は760mで、Kea pointのそれは956mだから、標高差はおおよそ200mだった。Mt. Cookは万年雪に覆われ、頂上は台形で、登山には沢山のスクリーパーハークンが要ると思われた。しかし、Canterbury 平野の西には2,000m級の魅力的な山々が沢山横たわっており、レンタカーを使い、日照時間が午前5時～午後9時の季節ならば、十分堪能出来そうである。



Hermitage ホテルのテラスに立つサーエドモンドヒラリーの像
彼の視線の先にMt. Cook

福岡・佐賀県境の山 浮嶽

うきだけ

No.13316

◆松隈 茂

浮嶽(805m)の西は十坊山(535m)、北東は女岳(748m)であるが、この三山の北は福岡県で、南は佐賀県になっている。

浮嶽登山を決めたのは、渡部智俱人(わたべちぐと 元

日本山岳会会員 医師)著の「マイカーで行く九州100山峰」に取り上げられていたからである。

2018年10月12日にカーナビで浮嶽神社を検索したが、見付からず、糸島市吉井に浮嶽花木園があったので、妻と二人で、そこに向かって一般道を走行した。

花木園の隣のレストランの主人に浮嶽登山口を尋ねたら白木峠の先にゴルフ場があって、その先の左手に浮嶽登山口の看板があり、そこまで10分ほどと教えてくれた。脊振北山県立自然公園 浮嶽登山口 佐賀県 と書かれた看板の所で登山靴に履き替えたが、すぐ先で登山口5.5KMの表示が見えたので、車を動かした。

南登山口を見落として、先に進んだら三叉路になり、「浮嶽へ」の表示が見えたので、道幅8mの車道の路肩に駐車し、そこから歩くことにした。



浮嶽(805m)、2018.10

三叉路の左手は道幅4mの林道になっており、しばらく歩くと、右手に女岳、左手に浮嶽のKonide型山容の二山を見ることが出来た。荒谷峠に至るこの林道は西へ東へと蛇行して高度を上げているが、峠の近くの登山道の標識を辿って行くと、かつては多くの登山者が通ったことを想起させる狭い山道になった。

踏み石の一部は大きく崩れ落ち、古いトラトラロープは途中で切れ落ち、勾配も急で、帰りにここを下るなら、ロープの準備していないので、かなり危険を伴うことになる懸念された。慎重にそこを通過すると両脇に木々が繁り、程なく避難小屋があって、内には松葉掻きなどの掃除用具が整然と置かれていた。

すぐ先が浮嶽神社上宮の社で石囲いが設けられていた。その囲いの外の上部に等級が完全に削られた状態の等三角点国土地理院と書かれた三角点があった。

手持ちのGPSで測るとN33° 28' 12" E130° 05' 57"

で、三叉路からの所要時間は1時間20分だった。

頂上には浮嶽山頂の大きな看板があり、杉木立の切れ目からは唐津湾の一部が見え、北側にある大きな石の鳥居は風化によりコンクリート製かと思えるほどであった。この鳥居の北側は木々に覆われて、登山道はないが地図によれば、かつては胡麻田方面からの山道があったのかも知れない。

遅い昼食の後、下山することにしたが、避難小屋を通る前に南に下り、南登山道を辿ったため、岩の非常に少ない溝のような山道で、安全ではあるが、単調な佇まいだった。しかし一人の男性登山者と会った。

下った先は幅8mの車道で、南登山口の表示があった。午前中に車内からみた樽門の標識や山城の跡かと思わせる石積や給水ホースを思い出して、結局東の三叉路近くに置いた車まで3.5kmを40分掛けて歩いた。

帰路は吉井I/Cから二丈浜玉道路→202号→西九州自動

車道を経て宗像市の自宅に帰着した。



6. 平成30年度の福岡支部活動報告

英彦山登山に16名が参加 ～山の日記念登山大会in福岡2018～

No.12920

◆高木 莊輔

3回目の山の日記念福岡県民登山大会が、2018年8月11日(土)の「山の日」、福岡県の英彦山(1199.6m)、宝満山(829m)、風師山(362.2m)の三ヶ所で行なわれた。

これは、福岡県山岳連盟、福岡県勤労者山岳連盟、日本山岳会福岡支部、日本山岳会北九州支部、全九州アルパインガイド協会の山岳5団体で構成する「山の日」制定記念福岡2018実行委員会の主催で実施されたもので、私たち福岡支部は福岡県山岳連盟とともに英彦山を担当した。

当日は、午前9時から福岡県添田町の英彦山神宮奉幣殿前で記念式典が開かれ約200名が参加。戸高和義・福岡県山岳連盟会長、寺西明男・添田町長が、それぞれごあいさつ。ひき続いて英彦山神宮の高千穂宮司による安全登山祈願祭行なわれ、奉幣殿に登壇した山岳関係者による玉串奉奠があった。

式典の終りに寺崎良夫・福岡県山岳連盟避難対策委員長による登山上の注意と高木莊輔・日本山岳会福岡支部長による閉会のあいさつがあり、参加者が順次登山開始。この日は好天に恵まれ、福岡支部からも16名が参加、山頂までを無事復讐した。頂上では、記念バッジが配られたほか福岡県警ヘリコプターによる安全登山の呼び掛け(添田警察署)、銅の鳥居から奉幣殿までの800mの参道を走り登って速さを競う「英彦山参道駆け上り大会」(英彦山神宮)なども催され、ソバやぜんざいの販売とあわせて、会場広場は終日賑わった。なお、この日の様子は当日夕方のRKBテレビのニュース番組でも放映された。

“知られざる道”より雷山

No.8125

◆副島 勝人

◇期 日／平成30年11月17日(土) 曇り

◇参加者／7名(山行：6名、山麓周遊：1名)

松原稔、中村正義、松隈茂、森山幸美、

長岡ミツ子、副島勝人、高木莊輔(雷山山麓周遊)

◇コース・時間／雷山観音前バス停 9:50

井原集落への分岐点 10:35

井原山・雷山縦走路 12:25

944m(富士山) 12:32

昼食 12:47

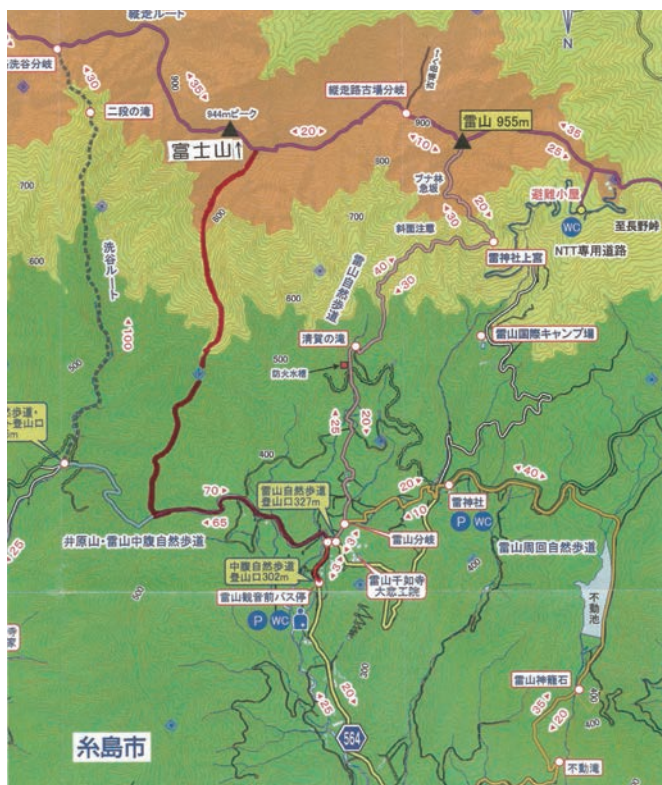
雷山 13:39

雷神社上宮 14:25

雷山観音前バス停 15:45

JR九州前原駅からコミュニティバスで終点雷山観音前バス停下車。バス停駐車場は雷山観音の紅葉見学で満車。高木支部長に激励の言葉を頂き出発。松原氏のガイドで、井原山・雷山山腹自然歩道に入る。曇り空だが雨の心配はない。自然歩道はあまり利用されていないのか荒れ気味である。途中から工事中の林道を歩き道標から右側の斜面を通る自然歩道に入る。登りこむと稜線上の平坦地となり井原集落と知られざる道への分岐点に出た。右折して知られざる道へ踏み込む。道は踏み跡もはっきりし、赤いテープが木の枝に取り付けてある。杉林の中の道を黙々として登る。人工林から自然林の中に入ると、鮮やかな紅葉が見られるようになってきた。そして木々の間から井原山や周辺の山々が見える。道は急登となり登りつめると雷山・井原山の縦走路に出た。約2時間の樹林帯の静かな道、一人ゆっくりと山を味わいながら登る道だろう。縦走路を井原山方面に少し行くと944mピークに出る。この地点は地図には載っていないが「富士山(ふじやま)」と名付けられ標識柱が立っている。ここから引

き返し雷山山頂に向かう。山頂から雷神社上宮を通り林道に入り雷山観音前バス停へと下った。



脊振山地 地藏 (675.2m) 登山 兼 忘年会

No.8125

◆ 副島 勝人

◇期 日／平成30年12月15日（土） 晴れ

◇参加者／14名（会員：12名、会員外：2名）

◇コース・時間／白糸バス停 10:25

白糸の滝駐車場 10:55

波呂展望台 11:45

地藏 12:17

波呂展望台 12:33

白糸の滝駐車場 13:10

白糸バス停 13:40

からコミュニティバスに

JR九州前原駅からコミュニティバスに乗り白糸バス停で下車。バス停から県道を長野峠方面に少し進み、「白糸の滝遊歩道」に入る。歩道は溪流沿いにつけられ整備されている。約30分で白糸の滝の茶屋に着く。これからは広域基幹林道雷山浮岳線を歩く。林道を会話も弾みながら調子よく歩いていく。40分ほどで波呂展望台に着いた。展望台からは壱岐の島がかすかに望め、眼下には糸島半島の平野が開けている。昼食後、展望台前の林道竣工記念碑の横から藪の斜面にとりつく。小枝をかき分け斜面を上がりこむと尾根状のところに出た。糸状になった布が巻き付いた鉄棒の道標が立っている。尾根を南に進むと地蔵の三角点（山頂）に出た。山頂は樹木に囲まれ見通しが利かない。「地蔵（675.3m）」と書かれた黄色いプラスチック板の標識が落ちている。途中には赤いテープが付けられており、登山者がいるのだ。10分ほど滞在し再び藪の中を引き返す。林道に戻り白糸バス停へ下る。

バス停から送迎バスできららの湯へ向かった。

○忘年会／きららの湯（糸島市二丈深江）

◇参加者／18名（会員：17名、会員外：1名）

林道と藪漕ぎ登山の汗を「きららの湯」で洗い流しリフレッシュ。支部長の挨拶と乾杯で始まり、大いに盛り上がりお開きとなった。



平成30年度福岡支部総会

No.9826

渡部 秀樹

◇日時：平成30年 5月20日（日）14時 開会

◇場所：福岡市立早良市民センター：早良区百道2-2-1

会 員 数：70名、総会出席：19名

委任状：27名、合計：46名

各議案は審議され承認された。役員改選についても留任が承認された。

総会後に記念講演として、福岡在住の元チベット人僧侶・ゲレック氏を講師に迎え「チベット・アムドの遊牧民、僧侶を経て日本へ」を渡部の進行・解説、対談形式で話してもらった。また、場所を移して「みくに」にて懇親会（16名参加）を開催した。

平成31年度 通常総会の開催について

◇日 時 平成 31 年 5 月 26 日（日）14 時 開会

◇場 所 福岡市立中央市民センター視聴覚室
福岡市中央区赤坂 2-5-8

記念講演会：会員活動報告（水野公代：桃源郷フンザの支援活動、辻和毅：出版記念講演）

などを予定

◇懇親会 「みくに」を予定

夏山フェスタ in 福岡2018

No.9826

渡部 秀樹

◇日時：平成30年6月23日（土）12時～19時、
24日（日）10時～18時30分

◇場所：電気ビル共創館（4階 / みらいホール）
福岡市中央区渡辺通 2-1-82

来場者数：23日約1,600人（昨年1,600人）、
25日約3,300人（昨年2,700人）

合計：約4,900人（第2回4,300人第1回3,700人）

国民の祝日「山の日」の制定を記念し、登山愛好家の裾野を広げる好機として、山に親しみ、理解を深めてもらうイベントを電気ビルみらいホールにて開催した。主催は日本山岳会などからなる全国「山の日」協議会を中心とした夏山フェスタ in 福岡2017実行委員会で、また協力団体として日本山岳会福岡支部、日本山岳会北九州支部、福岡県山岳連盟、福岡県勤労者山岳連盟なども加わった。

【セミナー】講師（敬称略）（来場者数）

《23日》・13:00 岸本俊朗「遭難事故の現場より報告」（225名）・14:15 山本正嘉「夏山登山を目指して～登山者に必要な体力とトレーニング」（320名）・15:40 磯野剛太「安全に登山を楽しむために」（190名）・16:40「山小屋オーナー座談会」剣沢小屋：佐伯新平、槍ヶ岳山荘：穂苅大輔、八ヶ岳・蓼科山頂ヒュッテ女将：米川佐和子（210名）

《24日》・10:00 吉川裕樹「GPSアプリの使い方」（300名）・11:20 渡部秀樹「海外トレッキング入門・その魅力」（230名）・13:00 小林千穂「心に残る山々」（390名）

・14:20 貫田宗男「天国じいじの世界の果てまでイッテ登らせてます！」（400名+250名）

・15:40 重廣恒夫「重廣恒夫のヒマラヤ登山塾－ヒマラヤ登山13回の経験から」（170名）・17:00 吉原哲士「水の屋久島・緑の浮島に暮して」（160名）17:50 大抽選会（220名）

『福岡県労働者山岳連盟主催講座』（3階E会議室）：夏山の装備とウェア（50名）、finetrack/夏山のアクシデントに対応するための安全対策講座（70名）、地形図とコンパスの使い方（95名）、簡単な体力トレーニング（山筋ゴーゴー体操）（50名）、登山計画の立て方と登山アドバイス（60名）、くじゅうの山のトイレ事情と携帯トイレの使い方（60名）、九電みらい財団/山で写真を楽しむ（60名）。

【ブース出展】メーカー関係13社、旅行関係4社、自治体関係13団体、その他11団体。

専用ホームページ：<http://natsuyama-fukuoka.jp/>

会員の出版

No.9826

渡部 秀樹

辻 和毅 著『山・水・人の風景』－地質コンサルタントの世界－
権歌書房 2018年11月 300ページ(5,000円+税)B5判、オールカラー

チベット・ヒマラヤの東カンリガルポ山群と探検史／ミャンマーからブータンにかけての辺境地域／探検史の断章／東南アジアから南アジアへ－大都会と水の風景－／大海の孤島に渡る（尖閣列島）／地下水と水資源の環境保全／邂逅のひとこま／郷土の情景／若き友へのメッセージ



支部会員動向（平成31年3月現在）

No.9826

渡部 秀樹

支部会員数：67名

支部準会員数：2名

永年会員数：4名

平成29年度入会数：正会員3名、準会員2名

《編集後記》

年明けとともに「平成最後の●△×」の文言が飛び交っています。福岡支部報第1号が発刊されたのは、平成4年（1992年）10月、今年で27年が経過しました。本支部報第32号は「平成最後の支部報」となります。平成8年（1996年）発行の第9号から編集を担当していますが、毎年この時期になると果たして原稿は集まるだろうか、いつも心配していました。さらに、この間、編集から印刷の作業形態も大きく進歩しました。平成時代の終わりに当たり、この27年を振り返ってみると活版印刷からワープロで入力切貼り編集、現在はデータで入稿、専門職でのデジタル編集・印刷へと大きな変様を改めて感じます。本号も原稿が集まるだろうかとの心配を裏切り多くの会員の皆様に寄稿いただきました。厚く御礼申し上げます。次号以降も積極的な投稿をお願いします。（K.K）

■発行者：高木荘輔 ■編集者：辻 和毅・倉智清司 ■発行日：2019年（平成31年）3月29日

■発行所：公益社団法人 日本山岳会福岡支部 〒811-1302 福岡市南区井尻 5-6-14-201 渡部秀樹 方 TEL/FAX 092-592-8170